

ヒサエ・ヤマモトの父親表象：「茶色の家」と「ラスヴェガスのチャーリー」

著者名(日)	平石（稲木） 妙子
雑誌名	共立国際研究：共立女子大学国際学部紀要
巻	32
ページ	111-122
発行年	2015-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003040/

ヒサエ・ヤマモトの父親表象

——「茶色の家」と「ラスヴェガスのチャーリー」——

平石（稲木） 妙子

1 ヤマモトの一世男性像

アジア系アメリカ文学に登場する移民世代の父親は、母親に比べると魅力に欠け、存在感も希薄である。日系二世作家のヒサエ・ヤマモトの場合も同様で、ヤマモトの代表作である「17文字」(1948)や「ヨネコの地震」(1952)などに登場する父親は、実直な働きものであるが、日々のサヴァイヴァルに必死なあまり常に苛立ち、粗野でもある。父親に対しては距離感を覚える二世の少女たちの同情や共感、父親の家父長的権威のもとで抑圧されている母親たちに向けられている。このような例からも察せられるように、ヤマモトのテキストにおける一世男性には、総じて「弱さ、死、崩壊」などネガティブなイメージがつきまとう(Crow 119)^①。だが注目したいのは、一世男性を主人公にした「茶色の家」(1951)や「ラスヴェガスのチャーリー」(1961)においてはヤマモトの父親表象に異なる要素が見られる点である。この二つのテキストでは、ギャンブルに溺れて転落する一世男性が描かれ、戦前から戦後にかけてのアメリカ社会における日本人移民の周縁性が照射される。この二つのテキストで特に注目したいのは、ヤマモトが冒頭に触れた代表作とは異なる視点に基づいて一世男性を描いている点である。先の代表作では、二世の娘たちの視点から一世の父親が観察されていたが、この二つのテキストでは、ヤマモトは三人称の語り手を用いて、主人公が転落するまでの過程を戦前から戦後にかけての日本人移民の歴史と交差させながら描いている。その結果、特に「ラスヴェガスのチャーリー」で顕著に認められるように、一世男性に対して同情や理解も示され、ヤマモトの父親表象は従来のように一面的ではなく、相反する感情が錯綜した両義的なものとなっている事に気づかされる。そこで、本稿では、従来のヤマモト研究において、十分に論じられてこなかった「茶色の家」と「ラスヴェガスのチャーリー」における一世男性を検討することで、ヤマモトの父親表象の変化について考察したい。

2 「茶色の家」

1950年代の初頭に書かれた「茶色の家」では、イチゴ栽培に従事していたハットリが、

イチゴの価格の暴落で行き詰まり、ギャンブルに依存するようになって生活を破綻させるまでの過程が描かれる。時代は日中戦争への言及があることから、1930年代の後半に設定されたものである。この時期における日本人農民の状況に即して読むと、ヤマモトはハットリを典型的な落伍者としてのみ描くのではなく、戦前の日系農民の状況を背景に描くことで、ハットリの転落までの過程が戦前のアメリカにおける一世男性の不可視化の過程に他ならない事を示唆している。例えば、ハットリが行っていたイチゴ栽培は、20世紀初めに西海岸にやってきた多くの日本人移民が従事するようになったいわゆるニッチ農業であった。イチゴ栽培はわずか数百ドルで栽培を始めることができたため、日本人には好都合であったのである (Neiwert 36)。また、手先が器用で、しゃがんだ姿勢での労働に強い日本人の進出により、1920年代の終わりには南カリフォルニアの農業生産のうち、イチゴ栽培のおよそ94パーセントは、日本人移民によるものとなった (矢ヶ崎 55)。

だが、戦前のアメリカでは、多くの日本人移民は、各地を転々としながらイチゴ栽培や農業を続けることを余儀なくされていた。日米紳士協約が締結された1908年以後、都市部の日本人移民に対する排斥運動が高まったため、日本人移民は徐々にカリフォルニア州などの農業地域に移動する。日本の伝統的な集約的耕作法を取り入れることで収穫をあげた日本人移民が農業で成功を収めるようになった。これに対して、白人の農業関係者は危機感を募らせ、排日運動が高まる。1913年には「外国人土地法」が制定され、「帰化不能外国人」の土地所有、賃借、譲受が制限された。これは帰化法（1790年）によって「帰化不能外国人」とされていた日本人移民を対象にしたものであったのである。続いて、1920年にこの法律の修正法が新たに制定され、日系農民を取り巻く状況は、さらに悪化した。この外国人土地法は、日本人に農地の購入を禁じ、そのような農地の借地を3年以内に制限したものであった。また、日本人移民が既に所有していた農地を仲間の移民に遺贈または売却することも禁止された。このような制約が課せられることで、多くの日系農民は果樹、葡萄その他長い期間、費用、労力を要する作物を作るのを避けるようになったという (Ichioka 156)。外国人土地法は日本人移民の経済的基盤を揺るがすだけでなく、心理的な損失感を与え、将来に対する見通しや希望を失う要因となったのである。

以上のような一世男性のアメリカ社会における周縁化を象徴するものとして、テキストで見逃せないモチーフが自動車である。ハットリは、賭博場に通うのに常に妻と5人の子供を連れて自動車で通う。この構図は、1930年代のアメリカ社会における自動車の象徴性を考えるとアイロニカルなものである。自動車は、アメリカにおいて「自由、希望、独立、解放」などを象徴するものとして捉えられてきた (渡久山 133) からである。日本人移民が進出した南カリフォルニアでも、1920年代には、自動車取得率も上昇し、1930年代になると道路の舗装も進み、郊外化が急速に進んだ。ハットリが通う賭博場が「アスパラガス農園の入り口部分に数本の巨大なユーカリの樹があり、家はその下に建てられていた」⁽²⁾と書かれていることから察せられるように、自動車の普及により1920年代に開花した消費文化の波が

カリフォルニアの農村地帯まで及んでいたことがわかる。

しかし、経済的発展が目覚ましいカリフォルニアにおける日本人移民の生活の厳しさは、以前と変わりのないものであった。1920年代半ばになると日本人移民の農業も安定期に入ったが、居住環境は以前と変わらず掘立小屋のような住まいであり、ペンキの塗られていない粗末なものが目立ったという(矢ヶ崎 51)。ヤマモトも自伝的エッセイ「油田地帯の思いでの生活——回想」(1979)で、一家が石油ランプを使い、電気もとっていない不便な生活をしていた様子が書かれている。当時、母がアメリカでの「原始的な生活」(91)を嘆いていたことも書かれ、戦前の日本人農民の生活は非常に厳しいものであった。ハットリが、ギャンブルで2,000ドルを獲得した時に、新車を買ひ、はじめての洗濯機も購入して、瞬間に、その大金がなくなったのも、それまで一家が当時の消費文化とは全く無縁の生活を送っていたことがわかる。

さらに自動車は、移動の自由を謳歌する新しいライフスタイルを生み出したが、「茶色の家」でハットリ一家が乗る自動車はそのようなアメリカの移動神話とは対極のものである。先に触れたように、一家が自動車で移動する目的地が「賭博場」でしかない点に、移動が自由の獲得や日常からの解放には繋がらないハットリの厳しい現実が示され、戦前のアメリカ社会において周縁化された日系移民の状況がここでも確認される。さらに、「茶色の家」における自動車は、アジア系アメリカ文学における移動のモチーフを検討する上でも示唆的である。伝統的なアメリカ文学において移動は、「独立、自由、個人的希望の達成や社会的再生」を促すものであるが、アジア系アメリカ文学における移動は、「従属や強制、自己や共同体の夢の実現の不可能性」を示すものであるとサオリン・ウォンは説明する(Wong 121)。つまり、アジア系アメリカ文学においては、移動にはしばしば脱出不可能性もしくは不自由なイメージ(“immobility”)が伴い(Wong 123)、従来のアメリカ文学における移動が自由や解放に向かう点を考えると対照的なものであるといえる。

以上のように「茶色の家」では、ヤマモトはハットリの状況を移動のモチーフを通して提示することで、ハットリの挫折が戦前のアメリカ社会で不可視化された移民世代の状況を反映している事を明らかにし、理解と同情を示している。だが、一方で、ヤマモトは別の観点からハットリをアイロニカルに戯画化して描いている点も見逃せない。それは、以下に述べる二つの場面によって見出される。まず、第一のものは、ハットリ一家と黒人との出会いの場面である。ハットリが通う賭博場の突然の手入れにより、ハットリを待つ家族が乗っている車に賭博場から一人の黒人が乗りこんでくる。初めて黒人に出会った子供たちは、「怖がって叫んだ」(42)と書かれ、一家にとって、黒人との出会いは初めてのことであったことがわかる。ハットリの妻も一瞬、逡巡するが、その黒人の必死な願いを受け入れ、車に乗せる。しかし、「クロンボ」を車に乗せた妻の行為を後で、ハットリは非難し、帰宅後も口論が続く。さまざまな人種が集まる賭博場では、黒人と一緒にいても気にしなかった夫の矛盾を指摘する妻の反論に苛立ったハットリは、妻を殴って病院に連れて行かねばならないほどの怪

我をさせてしまう。

この場面では、ハットリの人種意識がアイロニカルに描かれる。エイイチロー・アズマによると、一世は人種概念を本質主義化し、それを社会関係における唯一の真理として捉えていたという (Azuma 205)。つまり白人優位の支配的なイデオロギーを内面化し、白人以外の人種は、自分たちよりも下位に位置する存在として受けとめ、見下していたとされる (Azuma 191, 195)。ハットリが黒人を「クロンボ」と差別的に表現したのも、アメリカの人種的ヒエラルキーにおいて最下層にいた黒人を自分たちよりも劣る存在として位置づけ、偏見を抱いていたからである。また、ハットリの妻への暴力には、自分に刃向う妻を力でねじ伏せ、家父長としての権威を誇示するハットリの屈折した意識も示されている。かつては、イチゴ栽培で成功を取めたハットリが家庭内で絶対的な権威をもっていたことは、妻が夫を呼ぶのに「ミスター・ハットリ」と遠慮がちに呼んでいる点にも表れている。イチゴ栽培を諦めた事で、経済的基盤を失い、家父長としての権威も危うくなったハットリの焦燥感や挫折感が妻への暴力となって表れたのである。このように妻との関係においてハットリを描く際のヤマモトのアイロニーは従来のヤマモトの家族物語と同様に辛辣でもあり、主流社会のみならず家庭内でも差異化される妻に対する同情がこの場面で吐露されている。

さらに、最後の場面でもヤマモトの妻への同情が示唆され、ハットリに対する厳しい眼差しを認めることが出来る。ギャンブルに依存する夫に愛想を尽かして、家を出た妻は甥を通してハットリに生活の改善の余地がみられたことを知らされ、家に戻ってくる⁽³⁾。しかし、最後の場面では、一家が再び、いつものように自動車に乗って、賭博場に通う姿が描かれる。ハットリが通う賭博場の経営者であるミセス・ウーは子供たちにクッキーをさしだしながら、ハットリ夫人が6人目の子供を妊娠していることに気付く。夫人の「荒涼とした目」(45)を見たミセス・ウーは、夫の運に生活を託すしかない状況に追いやられている夫人の行く末を案じる。ハットリの転落を通して戦前のアメリカ社会における日系農民の閉ざされた状況を示すことで、ヤマモトはハットリの転落に理解を示しつつも、一方でハットリが日本から持ち込んだジェンダー規範の犠牲者が妻であることを結末で示唆し、一世男性に対するヤマモトの思いは、「茶色の家」では両義的なものであったことがわかる。このようなヤマモトの一世男性に対する錯綜とした思いは、ほぼ10年後に書かれた「ラスヴェガスのチャーリー」ではどのように変化しているのだろうか。

3 「ラスヴェガスのチャーリー」

「ラスヴェガスのチャーリー」は、冒頭でも触れたように、主人公のカズユキ・マツモトの生涯を辿った物語である。ヤマモトは、細部を変更しているものの自身の父親をカズユキに投影させていることをインタビューでも述べており、実際、両者には共通点も多く見られる (Crow 76)。ヤマモトの父、カンゾー・ヤマモトは、熊本県の砥用町出身で19才の時に

アメリカにやってきた (“Small talk...”, *Los Angeles Tribune*, August 24, 1946)⁽⁴⁾。その後、南カリフォルニアで各地を移動しながらイチゴ栽培に従事していた。戦前、妻を早く亡くしたカンゾーは、第二次大戦中には、戦争で息子を失う。ボストン収容所を出た後は、各地と転々としてコックや皿洗いなどをするようになった。やがてラスヴェガスに移動した後は、中華レストランで皿洗いをして働き、病気で亡くなったという。このようなヤマモトの父の生涯は、そのままカズユキの移動続きの生涯とも多くの点で重なる。

ドナ・ナガタによると、戦後の一世は経済的にも心理的にも強制収容の損失から回復できず、二世に依存せざるをえない状況に追いやられたと言う (30)。ヤマモトも『ロサンゼルス・トリビューン』のコラム「スモール・トーク」で時折、同じような父の状況に言及している。例えば、戦後の父の「無責任な放浪癖」 (“Small talk...”, *LA Tribune*, Aug 24, 1946) について触れ、収容所から解放された後、各地を転々として漂流する父の不安定な生活を心配している様子が描かれる。レストランのコックや皿洗いなどの仕事についても理由をつけては、すぐ辞めてしまい、常に不安定な状況にあったからである。また、父の借金について銀行に問い合わせをした事 (Jan. 4, 1947) や、泥棒に入られて金を盗まれたので、送金して欲しいという父からの要請があった事 (March 11, 1948)、父がラスヴェガスで1日、10時間も皿洗いをしている状況 (May 22, 1948) などが書かれ、戦後、ヤマモトが父の流動的な状況を心配し、経済的援助もしていた事が伺われる。このような父の状況に対するヤマモトの複雑な思いが「ラスヴェガスのチャーリー」の根底にもある。だが、戦後、16年経過し、父や多くの一世が消えゆく世代となった1960年代の初めにヤマモトが敢えて一世男性の物語を書いたのは何故であろうか。

「ラスヴェガスのチャーリー」で繰り返し示唆されているのは、戦前から戦後にかけての日系社会の変化である。20才でアメリカにやってきたカズユキは、カリフォルニアのサンタ・マリアで農業を始める。やがて写真花嫁のハルを迎えて、農場も経営するようになり順調な生活を送っていた。カズユキを支えていたのは、戦前の日系社会であったことをヤマモトは、鮮明に描き出す。例えば、カズユキの農地のリースは日本人移民の援助によるものであり、相互扶助に基づいて形成されていた日系社会がカズユキのサヴァイヴァルにおいて重要な役割を果たしていたことがわかる。また、戦前の日系社会は緊密な関係が構築され、伝統的な日本の行事を移民同士で祝う習慣も定着していた。ヤマモトが新年に向けての準備や正月の行事を詳細に描き、最も多くのページを割いている点にもそれが反映されている⁽⁵⁾。このように、トシオ・モリの『カリフォルニア州ヨコハマ町』(1949)のように、戦前の日系社会は主流社会とは隔絶しながらも、移民同士は、相互に依存し合って、厳しい状況を乗り越えようとしていたことがわかる。

さらに、一世男性にとって重要な役割を果たしていたのが家族の存在である。イヴリン・グレンは、日本人移民にとり家族はサヴァイヴァルのために、欠くことのできない存在であったと説明している (Glenn 218)。特にハルのような写真花嫁としてアメリカに渡ってきた

一世女性の役割が初期の日系社会で果たした役割は大きく、一世男性の経済基盤を強化し定住を可能にした存在でもあった (Ichioka 164)。ハルは、「働きもので、従順で、ささやかな要求にも熱心に応じてくれた存在」(74) であったと書かれ、戦前の日本人移民が置かれた困難な状況で、農業を行うカズユキにとって、ハルはカズユキの精神的支柱であったのである。実際、カズユキの生活は、二人目の息子を出産した直後にハルが亡くなることで、大きな打撃を受ける。この出来事を契機にカズユキの生活は、安定から漂流の生活へと変化し、カズユキの転落の最初の契機となるからである。

ハルの死後、「ラスヴェガスのチャーリー」でも移動が重要なモチーフとなる。二人の息子を故郷に住む両親に預け、カズユキは季節労働者として各地を転々とする移動の生活を始める。最初は、カズユキは稼ぎの大半を実家に送り、周囲も驚くような堅実で「自己犠牲的な生活」(77) を送っていた。しかし、季節労働者としての流動的な生活はカズユキの転落の始まりを意味していた。仲間との生活で花札を覚え、ギャンブルにのめり込むようになったからである。戦前の一世の季節労働者たちの生活が総じて荒んだものであったことは、例えば、ヤマモトと同世代の二世作家ワカコ・ヤマウチの「オトコ」(1980) でも明らかである。各地を転々と移動する日系の季節労働者達は、花札に興じたり、酒を飲んで労働の憂さを晴らし、刹那的な生活を送っている様子が描かれている⁽⁶⁾。このような状況で、日本にいる両親や子供のために懸命に働き、送金をしていたカズユキも定住の場を失い、移動続きの生活を始めることで、次第に自身を磨滅させていく。

また、「ラスヴェガスのチャーリー」では、第二次大戦中の強制収容がカズユキの生きる意欲を根こそぎにし、転落を決定づけた大きな出来事であったことが示されている。アメリカ社会の人種主義に基づく強制的な移動はカズユキの再生を不可能にしたのである。カズユキの父親が亡くなった後、二人の息子は日本からアメリカに戻り、農業を再開したが、ほどなく強制収容によってその生活を断たれてしまう。カズユキはポストン収容所の「暑さとほこりと泥」(79) に一端、慣れれば「それほど耐えられないものである」と感じるようになる。しかし、一方で単調で退屈な収容所での日常はカズユキを次第に蝕み、再び花札に興じるようになる。このように、強制収容はカズユキが「ラスヴェガスへと繋がる道に足を踏み入れた」(80) 契機となった決定的な出来事であったことをヤマモトは示唆する⁽⁷⁾。

先述したように、強制収容によって最も強い逆風を受けたのは、一世の男性であったことは日系アメリカ文学でも繰り返し提示されている (Kim 173)。特に、戦後のいわゆる日系人の再定住期は高齢化した一世男性にとっては厳しい状況であったことは、例えば、ヤマウチの「センセイ」(1977) でも示唆されている。かつては仏教会の指導者として収容先のツーリレー収容所内で一目おかれていたコンドーであるが、戦後は、家族のもとに帰ることもせず、ラスヴェガスを漂流する生活に陥っている。そしてギャンブルに浸り、物乞いをするほどまでに落ちぶれているコンドーにはかつての権威もなく、戦後、一世のアメリカ社会への復帰は容易ではなかった事がわかる。それは「ラスヴェガスのチャーリー」においても同

様である。1945年の1月から収容所からの帰還が始まったが、特に多くの日系人が戻った西海岸には差別的感情は根強く残り、暴力的事件などにも日系人は遭遇した⁽⁸⁾。ロサンゼルスに戻ったカズユキもメキシコ系の男性から戦争の事で、脅迫され、困惑する。かつては、メキシコ系移民を雇う立場にあったカズユキだが、戦後は唯の漂流者でしかない自身とメキシコ系移民の立場も逆転している。

また、収容所を出た後のカズユキは、仕事も長続きしない。戦後は、リトル・トーキョーでビルの管理人となるが、ビリヤードに入りびたりであったため、解雇される。その後は、ラスヴェガスに移動して、中国人が経営するレストランで皿洗いの仕事を心得て働くようになる。しかし、「罪の町」と呼ばれるラスヴェガスへの移動は、さらにカズユキを転落させる結果となる。中国人従業員との共同宿舎に寝泊まりし、休みの時には、ギャンブル場を転々とする生活を送る日常を過ごすようになるからである。妻のハルが生きていたころの豊かな食生活とは対照的に、酒とスープと御飯だけの粗末な食事を続けることで、年老いたカズユキの身体も蝕まれ、遂には死に至る病に侵されて亡くなる。

以上のように「ラスヴェガスのチャーリー」におけるカズユキのたび重なる移動は、場所の喪失を意味している事は明らかである。エドワード・レルフは『場所の現象学』において場所の本質は「場所を人間存在の奥深い中心と規定しているほとんど無意識的な「意識の志向性」に存在する」と定義する（レルフ 114）。つまり場所は人が「世界の中での自らの方向を見定めていく出発点」（レルフ 115）となるのである。カズユキの移動が不毛であるのも、移動するたびに彼の孤立は深まるからである。ラスヴェガスではカズユキが周囲の白人やアジア系移民に親切にされながらも、「チャーリー」と呼ばれて匿名化する点にアメリカで場所を失った戦後の一世男性の状況が集約されている。日本人移民としてのアイデンティティを喪失し、ラスヴェガス熱の犠牲者⁽⁷⁰⁾と化したカズユキは「全く治療の手立てのない病気の犠牲者」⁽⁷⁰⁾となる。シェンメイ・マは、小説や映像で繰り返し描かれるアジア系男性のギャンブルへの依存は故郷やアイデンティティの喪失によるものであり、同時に、フロイドがドストエフスキー論で指摘したように、一種の「自己処罰」でもあると説明する（Ma 17）。カズユキがギャンブルへの依存から脱することが出来ないのも、「価値のない存在」⁽⁷⁷⁾となった自分への苛立ちや敗北感によって生じた自己叱責としても捉えることが出来るだろう。

4 一世男性とモデル・マイノリティ

以上のように「ラスヴェガスのチャーリー」は、「茶色の家」と同様に一攫千金を夢見てギャンブルに溺れる一世男性の転落を描いている点では、共通している。しかし、このテキストの最後の場面は、「茶色の家」の最後の場面とは際立って対照的である。カズユキに対しては、理解と同情が一貫して鮮明に示されているからである。例えば、カズユキの死後、

語りの視点は息子のノリユキに転じ、ノリユキの父に対する「背反する気持ち」(85)が語られる。父の「弱い倫理観」(85)や、ろくな仕事にもついていなかったことを恥ずかしく思っていたが、父は本来、決して「悪い人」ではなく、精一杯、生き抜いてきたことを認め、息子としての父への理解が最後に示されている。父の治療をした日系の医者も、カズユキが少なくとも人生を楽しんで生きたことを認めたいとして、治療費も求めずその死を悼む。このような最後の場面における一世男性に対する共感は、「茶色の家」における一世男性に対する両義的な観察とは対照的でもある。このような変化をヤマモトに促したものは何であったのだろうか。

1950年代の後半になると、アメリカでは戦後の日系人の社会的、経済的地位の上昇に関心が寄せられる。勤勉に努力して、主流社会への同化に励む日系人をいわゆる「モデル・マイノリティ」として評価する50年代後半から60年代にかけての風潮がこの時期にあった。この点は、カズユキの息子、ノリユキを通して確認される。戦後、ノリユキは収容所で知り合った二世女性のアリスと結婚して、ロサンゼルスで設計事務所に勤め、堅実な市民生活を送っている。かつては、ノリユキは、帰米として蔑まれながらも日本の文化や伝統を愛し、戦争中も日本を支持し、ツーリレー収容所に収容されもした。しかし、アリスとの恋愛を契機に変化し、陸軍への入隊を希望して、日本語指導員として兵役を終えたのである。また、肝臓癌を患った父を治療した医者も日系二世であり、移民世代とは異なった戦後の日系人の社会的上昇が示唆されている。ここで注目したいのは、カズユキを診察した二世の医者が、カズユキの生涯にある種の羨望すら抱いている点である。社会的には安定しているが、成功だけを求めてきた自身に対してある種の空しさを医者は吐露している。自分とは対極的な存在であるカズユキへの羨望には、アメリカ社会での受容を求めて、努力を重ね、成功を収めることが出来たものの、その一方で、主流社会の人種主義による抑圧を彼自身が常に感じていたことを示している。モデル・マイノリティとはあくまでも主流社会への同化や白人優位主義を前提にした言説であったからである (Osajima 168)。

戦後、二世のアメリカ社会への統合が進むにつれて、「差別を経験しながらもそれを自助努力や愛国心によって克服したという成功物語」を日系人アメリカ人の自画像として描いた過程で、成功者としての日系アメリカ人のイメージはアメリカ社会に浸透された (南川 30)。「ラスヴェガスのチャーリー」の結末で、カズユキに対する二世の複雑な思いにヤマモトが触れているのも、カズユキのように周縁化された一世男性の存在が、戦後のアメリカ社会で忘却の彼方に追いやられることへの抵抗がヤマモトにはあったのではないかと思われる。戦前から戦後にかけての日系人の歴史の最も過酷な時期に、長い間、「帰化不能の外国人」としてアメリカ社会で不可視化された多くの一世代の「葬られた過去」(Ichioka 1999 v) が抹殺される状況に対抗してヤマモトは1960年代の初頭に一世男性を主人公にした物語を構築したのである。戦後のアメリカ社会で場所を喪失し、ヤマモト自身の父のようにディアスポラと化した一世男性の声なき声の回復を求めたヤマモトの試みには、日系二世の社会的上昇に対

するヤマモトの屈折した思いが示されているようにも思われる。以上のように、常に中心よりも周縁に目を向けてきたヤマモトの日系作家としてのスタンスが二つのテキストにおける父親表象にも認めることが出来るだろう。

〈注〉

- (1) この点について聞かれたヤマモトは、「一世の父親達は、どうあるべきか教えられてきたことに従って行動していたのです」と述べて、特に一世男性に対してヤマモト自身が悪意を抱いていたわけではないと説明している。Charles L. Crow “A MELUS Interview: Hisaye Yamamoto.” *MELUS*. Vol. 14. No. 1 (Spring, 1987), 80.
- (2) Hisaye Yamamoto, “The Brown House” *Seventeen Syllables and Other Stories*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1998, 39. テキストからの引用はすべてこの版により、以後、本文中ではページ数のみ付す。
- (3) ハットリの妻の17才の甥がハットリの様子を見にやってくる。この時の甥の服装や、態度はハットリの理解を超えているものである。また甥の英語も理解できないハットリは焦って、「日本語で話せ」と怒鳴るほどであった。特に甥の口語的表現 (“Your wife’s taken a powder” 44) を誤解して焦るハットリを通して、移民世代の一世とアメリカ生まれの二世との文化的差異をヤマモトはユーモラスを交えながらも揶揄している。ヴァレリー・マツモトが指摘したように、1930年代はアメリカ化が進む二世の成長によって、移民世代の親との差異化が進み、日系社会は転換期を迎えていたことがこの場面でも了解される。Valelie J. Matsumoto, “Redefining Expectations Nisei Women in the 1930s”, *California History* Vol. LXXIII No. 1, Spring 1994, 45-53.
- (4) ヤマモトは、1945年から3年間、アフリカ系の週刊新聞『ロサンゼルス・トリビューン』で記者として働き、「スモール・トーク」と題されたコラムも担当していた。このコラムでは戦後のヤマモトが参加した公民権運動や平和運動に加えて、父をはじめとする家族の生活についても度々、触れられている。
- (5) ヤマモトが「ラスヴェガスのチャーリー」の構想を記者時代に既に抱いていたことは、1948年1月10日付のコラムを通して確認される。子どもの頃の回想として、新年に向けての準備などについて書かれているが、それらは一部、修正されながらもそのまま「ラスヴェガスのチャーリー」で用いられている。
- (6) 花札は、主流社会との交流もなく、余暇を過ごす方法も限定されていた一世男性、特に農業や漁業に従事している肉体労働者の間で人気があったという。Richard Nishimoto, *Inside an American Concentration Camp: Japanese American Resistance at Poston*, Arizona. Ed. by Lane Ryo Hirabayashi. Tuscon: The UP of Arizona, 1995, 97.
- (7) ポストン収容所内でギャンブルが流行したため、特に若い二世への悪影響などが懸念され対策なども講じられたとされる。この点については以下で詳細に説明されている。Nishimoto, 150-162.
- (8) ヤマモトは、「スモール・トーク」でも、戦後間もない時期に、ロサンゼルスで父が遭遇した同様の出来事を具体的に書いており、「ラスヴェガスのチャーリー」では、その時の会話なども使用されている。例えば、1945年10月1日付のコラムでは、日系人であることがわかると厳しい言葉を投げかけられることが多いと書き、父が戦争の事で白人男性から威嚇されたことが書かれている。また、1945年11月12日付のコラムでは、父がナイフで脅迫された様子についても触れている。再定住期の日系人の状況については以下を参照。Greg Robinson, *After Camp: Portraits in Midcentury American Life and Politics*. Berkeley: U of California P, 2012.

参考文献

- Azuma, Eiichiro. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*. New York: Oxford UP, 2005.
- Crow, Charles L. "A *MELUS* Interview: Hisaye Yamamoto." *MELUS*. Vol. 14. No. 1 (Spring, 1987), 73-84.
- . "Issei Father in the Fiction of Hisaye Yamamoto's Fiction." "Seventeen Syllables." Ed. and with an introduction by King-Kok Cheung. New Brunswick New Jersey: Rutgers UP, 1998, 119-128.
- Glenn, Evelyn N. *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service*. Philadelphia: Temple UP, 1986
- Fox, William. *The Desert of Desire: Las Vegas and the Culture of Spectacle*. Reno, Nevada: The UP of Nevada, 2007.
- Gragg, Larry. *Bright Light City: Las Vegas in Popular Culture*. Lawrence, Kansas: The UP of Kansas, 2013.
- Ichioka, Yuji. *A Buried Past: A Sequel to the Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection*. Los Angeles: UCLA AASC P, 1999.
- . *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1852-1924*. New York: Free Press, 1988.
- Kim, Elaine. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple UP, 1988.
- Ma, Sheng-mei. "Asian Diaspora Does Vegas: Waves of Working-and First-Class." *Sun Yat-sen Journal of Humanities* 26 (Winter 2008), 17-32.
- Matsumoto, Valerie J. "Redefining Expectations Nisei Women in the 1930s", *California History* Vol. LXXIII No. 1, Spring 1994, 45-53.
- . *Farming the Home Place: A Japanese American Community in California 1919-1982*. Ithaca: Cornell UP, 1993.
- 南川文里『日系アメリカ人の社会学——エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社、2007年。
- Mori, Toshio. *Yokohama, California*. Seattle: U of Washington P, 1985.
- Nagata, Donna K. *Legacy of Injustice: Exploring the Cross-Generational Impact of the Cross-Generational Impact of the Japanese American Internment*. New York: Plenum Press, 1993.
- Neiwert, David A. *Strawberry Days: How Internment Destroyed A Japanese American Community*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- Nishimoto, Richard S. *Inside an American Concentration Camp: Japanese American Resistance at Poston, Arizona*. Ed. Lane Ryo Hirabayashi. Tuscon: The UP of Arizona, 1995.
- Osajima, Keith "Asian Americans as the Model Minority: An Analysis of the Popular Press Image in the 1960s and 1980s" *Shattered Windows: Promises and Prospects for Asian American Studies*. Ed. Gary Y. Okihiro et al. Pullman: Washington State UP, 1988. 165-174.
- レルフ, エドワード『場所の現象学——没場所性を越えて』高野岳彦他訳、筑摩書房、1998年。
- Robinson, Greg. *After Camp: Portraits in Midcentury American Life and Politics*. Berkeley: U of California P, 2012.
- Stout, Janis P. *The Journey Narrative in American Literature: Patterns and Departures*. Westport, Connecticut: Greenwood P, 1983.
- 渡久山幸功「フリーウェイの果てにみるもの——陶醉と狂気のはざままで」山里勝己編『移動のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房、2011年、133-156。
- 矢ヶ崎典隆『移民農業——カリフォルニアの日本人移民社会』古金書院、1993年。

Yamamoto, Hisaye. "Small talk..." *Los Angeles Tribune*, 1945-1948.

_____. *Seventeen Syllables and Other Stories*. New Brunswick: Rutgers UP, 1998.

ヒサエ・ヤマモト『ヒサエ・ヤマモト作品集 —「17 文字」ほか 18 編』山本岩夫、桧原美恵訳、南雲堂フェニックス、2008 年。

_____. "Seventeen Syllables." Ed. and with an introduction by King-Kok Cheung. New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1998.

Yamauchi, Wakako. *Songs of My Mother Taught*. Ed. and with an Introduction by Garrett Hongo. New York: The Feminist P, 1994.

Wong, Sau-ling Cynthia. *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance*. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1993.

The Father Figure in Hisaye Yamamoto's "The Brown House" and "Las Vegas Charlie"

Taeko Inagi Hirashi

The purpose of this paper is to examine the Issei fathers in Hisaye Yamamoto's two stories, "The Brown House" and "Las Vegas Charlie." In her stories, Yamamoto dramatizes the struggles of Issei fathers and mothers in her earlier stories. The Issei mothers are the victims of their Issei husbands, who repress their wives with traditional Japanese gender codes. Yamamoto describes such Issei males with irony and sometimes with derision, while she shows her compassion for the unfruitful rebellion of the Issei women.

However, it should be noted that Yamamoto shows a different view of Issei fathers in "The Brown House" and "Las Vegas Charlie." The two stories are similar in the way they depict the male protagonists. They are compulsive gamblers and become losers. In addition to that, instead of using a sensitive girl as she does in her earlier stories, Yamamoto adopts a narrative voice, which is objective and detached, in the two stories. With the use of such a narrative style, she reveals that the decline of the two fathers is caused not only by their inner weakness but also by the social marginalization caused by racial prejudice and discrimination against Japanese immigrants. Particularly in "Las Vegas Charlie," Yamamoto reveals that the internment during the WWII was an utter blow to the Issei by summarizing the entire span of the Issei history into the 1950s.

It is often pointed out that father figures in the stories of Yamamoto are normally presented in a negative light, but reading "The Brown House" and "Las Vegas Charlie" will lead us to recognize that Yamamoto's view of Issei fathers is not always critical and ironical but more complicated and ambivalent.